

笹ヶ峰 乗鞍 ヒルクライムを終えて おおぞらさんへ

【子どもに凄いと一言もない 言えない!!】

笹ヶ峰ヒルクライム、ガー君と青ちゃんは、炊事用具や食料を持つので、それを言い訳に電気自転車を選んだ。重さは、ロードやマウンテンバイクより重い。青ちゃんは、ほとんどその利点を利用したが、途中から、できるだけ頼らないようにした。この自転車は、電気を入れると、前後のランプが点灯して、使用しているのが傍目にもすぐ分かる。しかし、ガー君を見ていると、全く使っていない様子が見えた。子どもの頑張り、そして、同等の土俵で、共にその頑張りを楽しむ、同じ充足感を味わいたいという思いからだと言う。

数日後、赤木さんは、子どもがどんな所を、どんな風に走ったのかを知りたいために、感じるために 同じコースを一人で走ったと言う。

そして、今回の乗鞍ヒルクライム。青ちゃん夫婦及び大津賀さんは、電動で走った。途中、電動の楽しさや楽しさ、汗もかかないで快適だ などと、余裕の話をしたりして登った。昼平に着く頃、大津賀さんは、今度は、電気ではなく、子どもたちと同じ自転車で登って来たいと言った。同じ土俵、同じ環境で、満足を共にしたい、共通の喜び 感動を共にしたいと言った。

青ちゃんは、笹ヶ峰も乗鞍も、複数回以上、電気無しの自転車で登ってきた。だから、そのつらさや大変さを知っていると同時に、大人も子どもも時間の長さこそ違えど、その質としての時間は同じだと思っている。

だから、それに挑戦し、成し遂げる子どもの凄さに敬服する。自分が成し遂げてきたこと、挑戦してきたことを、子どもに落とし込む、子どもと共に成し得る、一緒に同じ土俵、同じ道具、同じ気持ち等で、対等にやり遂げた時にしか、「おまえらは凄い、素晴らしい」という言葉を使わない。自分もできない、自分もやらない 一緒にやらない 挑戦しないで傍目から見て 【凄い】なんていう言葉は、相手に失礼であり、軽い言葉であるように思えるからである。

登山も同じ。何かを見るため 何かを成し遂げるため 何かを体験するために登るのは、人それぞれである。乗鞍ヒルクライムも、頂上直下では、曇りのち雨であり、絵はがきやビデオで見えるような光景は、目にすることはできなかった。大人は、3000 位の光景を見せたかったと残念に思う気持ちがある。しかし、特に大地の子どもたちはメルヘンとファンタジー。それが目的ではなく、自転車を押しながら友達とおしゃべりする、漕いだり押したり歩いたり、熊や動物や植物を見たり、おやつを楽しみにしながら、疲れたを口にせずに、ただただ自転車と共に 時を過ごしている。そして、頂上に着いた時も、大人の喜びと違い、冷静で、単なる通過儀礼のような雰囲気がある。まさに にじみ絵。出来上がった絵は、セミの抜け殻と同じで、その過程を楽しむことが、真の喜び楽しみであるからである。

だからこそ、自分の体験したことを子どもたちと一緒に、同等の立場でやった時にしか、【凄い】とは言わないし言えない。真に心から言うことはできない。

逆に、そんな可能性を子どもたちの中に見いだしたいからこそ、自分は好奇心を持ち、面白い事、魅力的な事に挑戦し、それらを、どうしたら子どもたちと一緒に共有し、同じ土俵で体験し【凄い】を連発したいために、子どもたちと日々過ごしたい。

それが 青ちゃんの大地である